

つくばね

～地域から世界へ、支援と協力の輪を広げよう～



No.68

発行：令和5年3月22日
茨城県青年海外協力隊を育てる会
発行人：小川一成
編集：広報文化委員会
事務局：つくば市高野台3-6 〒305-0074
JICA筑波センター内
TEL 029(838)1111
印刷：合資会社おた

平和で戦争や貧困がなくなるための小さな一歩



茨城県青年海外協力隊を育てる会
副会長・結城支部長 臼井平八郎

茨城県青年海外協力隊を育てる会は、1997年1月26日の発足当時から、小川一成会長を先頭に活動を続けています。私も青春時代に海外ボランティアを実現できなかったという思いから入会させていただき、海外との交流活動に一翼を担わせていただいています。

私の両親は、戦中、戦後を通してともに教員をしていました。父は私に「たった一度の人生だから、夢に向かって自由に悔いのない人生を送れ。そのためには人一倍努力をしろ。自分は父親だからすべての責任を取る」、母は「人は幸せになるためにこの世に生まれてきた。幸せを社会全体で応援することが大切」と教えられてきました。その教えを受け、若いころにはアルバイトで生活しながら海外を回り、一時はブラジルのアマゾンで生活しようとする時期が



ホームステイ中のチャンマニーさんと
ボンスック君

ありましたが、それは叶いませんでした。

茨城県の育てる会では、青年海外協力隊が送り出した県内の青年たちを激励するとともに、海外から

子供たちを招いて交流を図るなどの活動を行ってきました。アジアで貧困に苦しむラオスを応援するために、特別事業を組みました。青年海外協力隊は1965年に第一陣がラオスに派遣されました。まずはラオスという国を知り、交流を図るために、ラオスの高校生を日本に招く事業に取り組みました。ラオスの高校生が日本の文化や生活を知るとともに、育てる会の会員や日本の高校生たちがラオスという国を知り、交流を図っていこうというのが目的です。

特に印象に残っているのは、25年前に私たち家族が、2人のラオス人男女高校生を10カ月間、ホームステイで受け入れたことです。2人は地元の県立高校に聴講生として通い、同世代の学生と勉強や部活動で交流しました。

自宅では育てる会の家族会員が集まり、日本語の特訓を行いました。2人は毎晩10時ごろまでテレビも見ずに勉強し、日本に来てから3カ月ほどで平仮名やカタカナをマスターしました。高校の先生方のはからいで、2人は沖縄の修学旅行に参加することもできました。

男子高校生は帰国の際の作文に「このご恩は一生忘れません」と記しました。女子高校生は、通っていた高校で全校生徒の前で「涙そうそう」を素晴らしい日本語で発表しました。

今では、この男性はラオスのアメリカ大使館で元気に働き、女性もラオスの日本語学校の先生や通訳として活躍

し、今も交流が続いています。このラオスとの交流は、定期的記念事業として行い、5年に1度程度、高校生約15人を日本に招待しています。ラオスと日本の友人・知人は増えて、友情・信頼の財産を築いてきました。

しかし、今はコロナ禍のために青年海外協力隊の派遣も一時中止となり自由に海外との行き来もできなくなってしまいました。また、ロシアのウクライナ侵攻など、地球上での戦火は絶えず、尊い命が失われています。

帰国隊員のその後の活動紹介

今に繋がるきっかけ

私は幼い頃に見ていたテレビの中で貧しさにより困っている発展途上国の人々を観たことをきっかけに「貧困」という社会問題に関心を持ち始めました。それから国際関係の大学に進学し、大学1年生の時に初めて発展途上国を訪れ、現地の様子を直接的に実感しました。しかし実際に感じたことは、テレビを通して感じた悲壮感や絶望感はなく、現地の様子はどこか楽観的で「貧困とは何なのか?」という疑問を持ちました。大学のフィールドワークやバックパック旅行を通して途上国に触れるたびにその疑問は徐々に深くなっていきました。大学院への進学や青年海外協力隊としての派遣を通して研究と隊員活動の2つの観点から現地の人々と密接に関わりを持ったことで、現場で起きていることは他人事ではないと実感し、責任感を持ってこの問題に取り組まなければいけないと決意しました。小さい頃に抱いた関心、10年前に感じた疑問、そして現地での原体験が今に繋がっていると思っています。

そうした中、世界が平和で貧困がなくなり、人の命を大切にする社会の実現は非常に大切なことです。それには、まず世界中の若い世代がお互いを知り、分かり合えることが必要です。そのための小さな一歩ですが、若い世代の国際交流は必要不可欠なものと思っています。そして、青年海外協力隊が自分の持てる知恵と技術を発揮できるためのサポートに全力を尽くしていきたいと思っています。

JICA専門家 ウガンダ駐在 ^{しとみ} 部 大輝
2017年度1次隊／ウガンダ／農林統計

再びウガンダへ

私は現在、「アタリ」という地域でJICA専門家として働いています。この地名は日本語では「当たり」から連想されるように縁起のいい言葉に聞こえますが、スワヒリ語の「Hatari(危険)」という意味からきています。過去から現在にかけて様々な民族間の争いが絶えなかったことに由来しており、今でも様々な事件が身近に起こることが多いのです。そのような地域でJICA無償支援による灌漑施設建設が予定されており、技術協力による灌漑施設運営能力強化プロジェクトが現在実施されています。

私の主な仕事内容は将来灌漑施設が建設された際に円滑に運営が実施されるように水利組合の立ち上げや運営支援をすることです。具体的には水利組合の規約作りや水分配のルール作り、農家の能力強化などを担当しています。一緒に働いている将来の水利組合のメンバーは異なる2つの民族から構成されていることもあり、様々な意見を1つにまとめるのがとても難しく、全員が納得する結論



農家との会議の様子

を出すまでに何回も会議を重ねて話し合いをしています。しかし、会議をするにしてもメンバーが来ない、平気で1時間・2時間遅れて来る、約束を守らない等の支援以前の問題に日々頭を抱えています。複雑な地域特性や新規のプロジェクトなど言い訳を探せばいくらでも見つかると思いま

すが、なかなか結果の出ない現状に危機感を感じているというのが今の正直な心境です。アタリ地域を良くしていくためには問題が山積みですが、日本人の専門家やボランティア、現地スタッフと協力しながら、少しずつ課題解決に向けて努力していきたいです。



農家へのインタビュー



参加率をあげるためのスタンプラリーで、シールをもらいに並ぶ農家



ケニアへの灌漑運営視察

隊員からの便り

**昨年8月にベナン共和国に赴任した大橋隊員から、
到着後間もない昨年12月に続いて改めて報告が届きました。**

2022年度1次隊/ベナン共和国
野菜栽培 大橋美月

昨年7月に壮行会で送り出していただきありがとうございました。少し落ち着いてきましたので現地での活動を報告いたします。

私は8月に派遣されてから現在で半年が経ちました。海沿いののんびりとしたグランボボという村で、日本人一人で生活しています。私がここに来たミッションは小規模農家の所得向上を目指しグランボボの村人と手を組み活動することです。言語の壁や文化の違いはありますが、親身になって話を聞いてくれる暖かい人々のおかげでのびのびとコミュニケーションをとることができています。大人も子どももとても気さくで、毎日出勤する度、50メートル先からでも私を見つけて大きな声で挨拶してくれます。

ここでの生活の中で気付いたことがあります。それは、怒りや悲しみも元を辿れば全て幸せや喜び、愛情に繋がっているということです。彼らは褒める時も喧嘩をする時も心をオープンにして伝えます。どんな事が起きても素直に伝え、愛情が故の出来事だと理解し認め合えばまた笑顔になれます。日本から飛行機で18時間かかる遠い国の村人と会話をしているのに、時々子供の頃の無邪気に過ごしていた時の懐かしさを感じます。大人になるにつれ、気付かぬうちに感情に蓋をして重く感じることもありま

したが、それは生きる上で必要のないことだと気付かされました。“もっと素直に認め合って良いんだよ”と。

文化の違いはありますが喜怒哀楽や感性は日本人もベナン人も変わりませんでした。感覚的には“日に焼けた日本人”です。

そして、万国共通で人は人との繋がりや愛情を求めていること、さらにこれが生きる上で一番大切なことだということも改めて実感しました。最近の私の習慣は自分のことも相手のことも許し愛情をもって大切にする事です。思った事は素直に伝え、楽しいことは共に大喜びし、共に時間を過ごすようにしています。少しずつお互いを認め合えるようになり心強くなりました。まだ活動としては大きな成果は出せていませんが、村人は一人でここへ来た私を家族のように愛してくれているので出来るだけ早く力になりたいです。

こうしてのびのびと活動ができていることはJICAを始め協力隊を育てる会や見守ってくださる皆様のサポートがあってこそです。とても感謝しています。私が海外に興味を持ったきっかけは、子どもの頃に読んだ絵本やテレビ、実際に海外に出た人からの言葉を聞いたことです。今まで知らなかったものや世界を見たり聞いたり想像すること

は心がワクワクしました。海の外への好奇心から国際学部のある大学に入学し、今こうしてベナンという普段テレビで見られない地域で有意義な時間を過ごしています。

茨城や日本の方々に対し、海の外の世界や心をオープン

にして生きる楽しさをもっと知るきっかけを作っていきたいと考えております。

今後の活動も順次お知らせしたいと思っています。



グランボボの農家さんたちと



グランボボの村の風景



近所の可愛い子供達



庭の木は子供達の遊具



3輪車のココナッツジュース屋さん



水上都市ガンビエにて住民と会話

令和4年度3次隊の県知事表敬訪問同行記

事務局長 小松崎 弘尤

令和4年12月15日午前11時30分～ 3次隊3名の県知事表敬訪問にJICA筑波センター睦好絵美子所長、JICA茨城デスク新井江梨子国際協力推進員、青年海外協力隊茨城県OV会の佐藤勝正監事、当会より小川会長が同席して横山征成副知事を訪ねました。

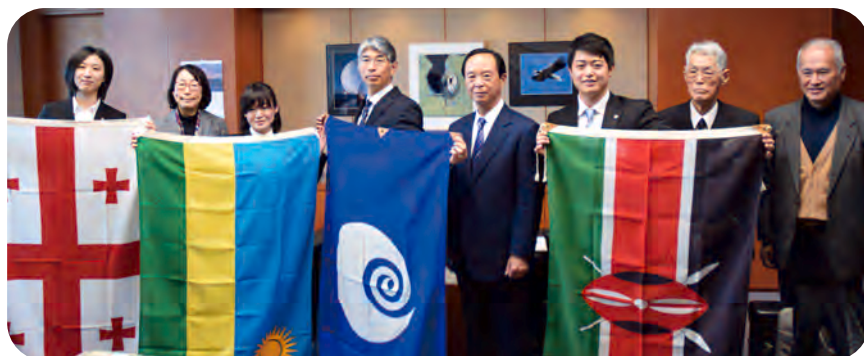
自己紹介に続き、横山副知事より隊員の任国、職種等について質問があり勝村貴子隊員はじめ各隊員は、はきはきと質問に答えられていました。隊員を代表して扇澤 舞隊員に茨城県国際親善大使委嘱状が、寺崎拓海隊員に記念品が副知事より贈呈され、激励を受け任国の国旗を持ち記念写真撮影し、知事表敬は終了しました。

隊員紹介(写真左から 敬称略)

扇澤 舞 ジョージア 青少年活動

勝村 貴子 ルワンダ 障害児・者支援

寺崎 拓海 ケニア コンピューター技術



各隊員が任国の国旗を掲げて

大いに盛り上がった壮行会

知事表敬訪問に引き続きJICA筑波センターで壮行会がおこなわれました。

1次隊、2次隊同様、JICA筑波センターのスタッフの方々の全面的なご協力をいただき、対面で行うことができました。どの隊員も海外からのJICA研修員や参加者の方々とじっくり話しこまれるなど予定時間が足りないくらいに盛り上がっておられる様子を拝見していると、隊員たちの今後の活躍に大いに期待が持てると感じました。

各隊員が健康・安全に活動されてまた元気で帰国されることを望みます。



アルメニアの研修員と



ウガンダの研修員と



ウガンダの研修員と



参加者全員で

トピックス

みなさまへ嬉しいお知らせです。

既にニュース等でご存知と思いますが、この度JAXAの宇宙飛行士候補者に選ばれた
 “諏訪 理(まこと)”さんはつくば市出身でJICAの青年海外協力隊員として平成19年11月に当育てる会が送り出した方です。
 (2007年度3次隊／ルワンダ／理数科教師)
 いささかのご縁がある方がこんな素晴らしい仕事に着かれるという事は会員として大変うれしいことだと思います。
 今後のご活躍を見守っていきましょう。

これまで・これからの事業について

■ これまでの事業報告

令和4年	11月 5 日(土)	第8回運営委員会 (中止)
	11月22日(火)	広報紙「つくばね」 67号発行
	12月 3 日(土)	第9回運営委員会 JICA筑波センター
	12月15日(木)	3次隊県知事表敬訪問・壮行会 県庁・JICA筑波センター
令和5年	1 月 7 日(土)	第10回運営委員会 JICA筑波センター
	2 月 4 日(土)	第11回運営委員会 (中止)
	3 月 4 日(土)	第12 回運営委員会 JICA筑波センター
	3 月16日(木)	4次隊県知事表敬訪問・壮行会 県庁・JICA筑波センター
	3 月22日(水)	広報紙「つくばね」 68号発行

■ これからの事業予定

令和5年	4 月 1 日(土)	令和5年度第1回運営委員会 JICA筑波センター
	5 月 6 日(土)	第2回運営委員会 JICA筑波センター
	5 月	令和5年度第1回理事会 JICA筑波センター
	6 月	令和5年度通常総会 JICA筑波センター

事務局だより

会員状況 () は家族会員

区分	令和5年2月末現在	
個人	65 (2)	
団体	18	
計	83 (2)	

編集後記

本号も「25周年記念号」の第3弾として、増ページで発行しました。

長年当会を支えていただきながらあまり寄稿していただかなかった臼井副会長に、長く国際協力に係わってこられたこと等について寄稿していただきました。

水戸出身の薮さんは協力隊平成29年度1次隊ウガンダで活躍されたのちにJICAの専門家として引き続きウガンダのコメ作りに携わっておられます。当会が壮行会で送り出した協力隊員が経験を生かして帰国後も引き続き海外で活躍されている様子を当会会員の皆様にぜひ紹介したく寄稿していただきました。昨年11月に新聞記事になっていたのをご覧になった方もいらっしゃることでしょ。専門家としての活動は協力隊の活動以上に困難が伴うと思いますが、そんな中でも寄稿していただきありがとうございました。

同じく水戸市出身の大橋さんは令和4年度1次隊で派遣され現役で活躍中のところ、活動報告を寄せていただきました。

赴任間もないころは色々な意味で大変な時期と思うのですが熱い思いを寄せてくださいました。ありがとうございました。